



釋永陽さんの越中瀬戸焼の作品。左上から時計まわりに、花弁鉢18,900円、●●●●●00,000円、白釉三角鉢3,675円、緑釉小皿2,625円、西王母入子盃(黒・ピンク)参考商品、黒釉木瓜鉢3,150円、長方鉢21,000円(すべて税込)。



「蛭谷和紙を手元に」をテーマに川原隆邦さんが企画した製品。上左／越中紙盤(しはん)参考商品。ガラスの皿と鳳凰をかたどった和紙を組み合わせた。上右／手帳のレフィルに蛭谷和紙を使った和紙革手帳19,950円(税込)。八尾和紙の桂樹舎、東京のsotとコラボ。下／蛭谷和紙の便箋や封筒など、各種サイズの製品も展開中。東京のWISE・WISE tools (<http://wisewisetools.com/>)などで購入できる。



上／平成16年に一新した登り窯。春秋の年2回、父娘の共同作業でまとめて作品を焼く。下／庄楽窯に併設するギャラリー。二人の作品を購入可能。



お父さまの釋永由紀夫さんとともに越中瀬戸焼を担う釋永陽さん。使う人の暮らしを豊かにする日常雑器を中心に作る。



春には家族が増える川原隆邦さんと釋永陽さんご夫妻。真冬の蛭谷和紙の工房での一枚。

手わざが生み出す用の美 1



ロクロを挽き、香炉に繊細な造形を施す。茶道歴の長い釋永さんは茶道具の作品も多い。同世代の女性作家と「かわいい茶会」というイベントも主催している。

越中瀬戸焼 「かなくれ会」陶芸展

日程：2014年6月上旬に開催予定
会場：越中陶の里「陶農館」
釋永由紀夫さん、陽さんをはじめ、富山県立山町の瀬戸地区で活動している四軒の窯元5人の陶芸家による展覧会。問い合わせは庄楽窯へ。

越中瀬戸焼 庄楽窯

富山県中新川郡立山町上末51番地
☎076-462-2846
<http://shakunaga.jimdo.com>

なかつたのです。19歳のときに父の隣で土揉みから始め、すぐにのめり込んでいきました。土作りや釉薬作りは全国的に分業が進んでいて、自分で作る陶芸家は多くありません。越中瀬戸焼の原料から自分で作るスタイルで陶芸をやりたいと思っただけです」

原料作りは、力仕事や地味な単純作業も多く、やっている人しか分からない苦勞も多いと釋永さん。しかしその経験が、川原さんの和紙作りの理解にもつながっているのです。「誰かに理解してもらおうことへの心強さは身にしみて分かっています。うちの両親も誰よりもそれを実感しているから、私たち夫婦を見守ってくれていると思うんです」

お互いの仕事を尊重し合いながら、地元の工芸を守る川原さんと釋永さんご夫妻。喜びも苦勞も分かち合える家族の存在は、今後の二人の創作活動を力強く支える源泉となることでしょう。

駆けとして、いろいろなことを試していきたいと思いますね」

地元で原料から作る。和紙と共通する越中瀬戸焼。

川原さんのことを「絶滅危惧種」と表現する釋永陽さんも、この地方でもの作りをする一人。良質な白土が採れることから、かつては加賀藩の献上品とされていた越中瀬戸焼の担い手です。昨年の春、川原さんと結婚し、もうすぐ第一子を出産予定だといいます。

「越中瀬戸焼も、和紙と同様に春夏に土を揉んで、釉薬を作って、冬に作陶します。雪の多いこの地方のもの作りの生活サイクルですね。地元で採取した原料から作るスタイルも和紙と同じ。お互いの仕事を理解しながら、協力し合える部分もたくさんあると感じています」

越中瀬戸焼は耐火温度が高く、薄く端正な造形が可能で、釉薬の発色が美しいという優れた特徴があります。明治から大正時代にかけて一度は衰退しますが、釋永さんの曾祖父が庄楽窯として復興。その後、父親が引き継ぎ、釋永さんも同じ道へ進みました。現在では窯は4つに増え、5人の作家が継承しています。

「子どもの頃から父が真剣に仕事をする姿を見てきたから、粘土はとても大切なものでした。遊び道具では